

品階位・三品階位より六品階位までの五等に  
分かれる。この流外階位が胥吏に当るのであ  
つて、胥吏という言葉もこの時分から用いら  
れるようになったらしい。またこの三グルー  
プの外に全く独立した將軍号がある。流内十  
品二十四班百二十五号、流外八班十四号とい  
うおびたらしい数で、前代以来の將軍号イン  
フレーションを制度化したものである。この  
ような貴族主義の集積をみる一方で、学校・  
試験制度が出現して官僚主義への新傾向が看  
取される。そして流内九品の中でも三・四品  
および五・六品に線をひくようになる。いわ  
ば新官僚線があらわれて来た。眼を北朝に転  
ずると、氏族制を脱した北魏は、天子は官僚  
制、北族有力者は封建制、漢人貴族は貴族制  
を望んだが、結局は南朝の貴族制に近いもの  
となつた。ついで北齊はやはり南朝に追随し  
ようとしたが、北周は之に反して貴族制度を  
排撃した。隋は北周の後をうけ勇敢に貴族主  
義に対決し、門地による任官を排して、個人  
の才能本位で官吏を登用することを強行し  
た。即ち中正の廃止と科擧の成立である。科  
擧は漢代の秀才・孝廉制度と相似たものであ  
る。しかし漢代の秀才は貴族主義の攻勢の前

に降服しなければならぬ貧弱な制度であつた  
が、隋唐の科擧は貴族主義を克服する逞しい  
生命力をもつた制度であり、ほとんど次元を  
異にするものであつたと言ふ方が適當であ  
る。ひろく言つて、漢は貴族制の胎生期であ  
り、唐は貴族制の没落期に當る。そして両者  
に挟まれた中間の貴族制時代は、中国史上に  
特殊な位置を占め、その後と併せて優に一  
時代として独立せしむるに足る価値がある、  
と著者はいう。

本文のほか補注が五十八項、それぞれが  
小論文になりそうなものばかりである。ここ  
で一寸口を挟ませて頂く。第六項の郷品とい  
う語、この補注では、「どうも史籍に見当ら  
ないようである」とある。唐長孺氏の前掲論  
文を見ていて気付いたのであるが、世説新語  
の尤悔篇に、温嶠が老母をふり切つて南去し  
たので「迺於崇貴、郷品不過也」とある郷品  
はこの中正の品第に當るのではなからうか。  
補注の次には参考文献が、その後には詳密な  
制度史用語索引がつづく。また本文中には理  
解に便するために魏晉、宋齊、梁陳、北魏、  
北齊・北周・隋の官僚ビラミッド構造図と漢  
代孝廉數より魏晉南北朝士庶線變遷表に至る

四十二表を収める。さらに新機軸は、引用の  
漢文にすべて懇切な日本語訳を附したこと  
である。全くかゆい処に手のといた作品であ  
る。も一つの新趣巧は扉で、題字は著者自  
筆、篆印は隴齋居士の刻するところ。なかな  
か雅なものである。(A5本文五八一頁、制  
度史用語索引二八頁、定価一一〇〇円、東洋  
史研究会刊、東洋史研究叢刊之一)

—森鹿三—

田中秀作教授 地理学論文集  
古稀記念

本論文集には二十三篇の論攷が寄せられて  
いる。その半ば近くは植民・開拓および集落  
に関する研究によつて占められている。田中  
秀作教授のライフワークは周知のごとく植  
民・開拓地理であつた。

しかし田中教授の既応の業績たる数十篇の  
論文のテーマは、植民・開拓地理の埒内にと  
どまらず、ひろく自然・集落・経済・交通・  
人口 *pop.* にわたり、本書二十三篇の研究対  
象の殆んどすべてを蔽つている。即ち田中薫  
教授は「田中先生とのつながりを水河問題に  
見出して」、水河に関する稿を寄せられ、位

野木教授は「中国調査に際しては先生の名著『滿洲国地誌』を座右に旅し」た思い出を記されて中国に関する phenology を執筆され、内田秀雄教授は「田中秀作教授がかつて『徳川時代近江商人の信仰に就いて』なる論考を發表せられた」「この研究に就いて近江に於ける集落景観に彼等の及ぼせる影響を論じておられる。例えば如是である。

以上は田中教授の学殖のふかく博いことを物語るものであるが、さて、かく自然地理・人文地理にわたつて二十三篇を数えるこの論文集を《書評》するとなると、それは私の能力の限界を遙かに超えるし、また与えられた時間も紙面も乏しきに過ぐる。さらに私は、この卓れた論敵のうちから若干をピックアップする能力をも欠く。そうかといつて、二・三行を以て各篇を論評させて頂くことの潜越さをも、矢張りためらわざるを得ない。それならばせめて論文要旨を誤り伝えること可及的にゆきを急じつつ、《文献紹介》の体裁をとつてこのたびの責をふさがせて頂かざるを得ない。この種の限定出版書の場合、それも強ち無用の業ではないだらうから。

\* \* \*

田中薫『エトロフ島チリツブ半島とその氷蝕の疑いある地形』——一九三三年、表題するところについて行われた現地調査の、日記体の観察記録。前川昇「河内石川谷の段丘地形」——該地域の構造解明へのひとつのアプローチとして段丘をとりあげ、その分類対比より河道変遷と地盤運動を考察する。福井英一郎『世界及び日本における気候の代表地点について』——国・府県などの行政単位の場合をもとより、関東平野というような地理的單元をとつた場合ですら、一・二の代表地点のデータをもつて件の区域の気候を代表させるには多くの問題がある。この問題を東京はたして日本の気候の代表地点たりうるかの形で吟味し、世界主要国についても同様の検討を試み、ついで日本の各気候区の代表地点を選出する。位野木寿一「中国における動植物景象」——盧鋈『物候初步報告』の紹介と一九四三・四五年兩度の現地視察に基づき、phenology、最後に G. B. Cressy の気候区と生物景象を対比する。吉田敬市「巨椋池沿岸の洪水」——表題するところにつき、明治以降におけるその被害ならびに対策を述べ、淀川全流域にわたる、より「根本的な綜

合開発」の要を説く。別技篤彦「中部ジャワの歴史に及ぼせる自然的災害について」——七〜一〇世紀のジャワ史を飾るシャイレンドラモ朝の文化は一〇世紀以降、忽焉として姿を消す。その因を火山活動およびその随伴現象のうちに探り、各種の自然力の強烈な風土における歴史と自然環境のかかわりを説く。宮川善造「マヤ文明の地理的背景」——序説において既述のマヤ文明論を批判したのち、マヤ文明の分布地域をカーネギー研究所その他による現地調査報告に基づいて検出し、該地域におけるマヤ文明成立の自然的・歴史的背景、ニュークリミア・アメリカおよび旧大陸の古文明地域との連関を検討し、当該文明の《連関的創成説》を結語とする。また形成期文明より開花期文明への飛躍的發展の因として、外部よりの技術導入と刺激を予想する。和田俊二「人類気候馴化に関する方法論的考察」——人類は自然に對し、ホモ・サピエンスとしてはその生理的機構を介して受動的適応をなし、ホモ・ファベルとしては生産過程を介して能動的適応をなす。人類気候馴化の問題はこの両面よりの攻究を要すと

し、寒国人種群の熱帯栽培のケースを事例と

して検証する。海野一隆『中國仏教における世界区分説』——インド古伝承に胚胎する四主説を、東洋地理思想史上に位置づけ、その祖型の探究、四地域の現実地表上における比定のうち、中国および日本への伝流と展開をのべ、四主説がその仏教的ドグマの故に停滞し、ヨーロッパの地理学の前に葬られてゆく過程をあとづける。西村陸男『藩領と家内工業』——江戸時代における生産地域の形成に、今日のいわゆる工業立地因子よりは、封建権力の政策による影響という点を重視し、家内工業の発達を所領と関係づけて分析する。即ち大藩およびその対照のケースとして零細藩・天領・旗本領をとりあげ、そこに想定さるべき幾つかの類型を求めて比較検討が行われる。秋山桓士『海防軍津の本陣の研究』——近世宿場町研究のうちでも、従来、陸駅に比して看過されがちであった海駅に着目し、室津の歴史地理、その本陣の敷、位置の推定、宿休大名との関係、民家構造の特色についてのべる。織田武雄『地中海・黒海沿岸における古代ギリシアの植民』——古代ギリシアの地中海世界における指導的位置を基礎づけた植民活動について、植民活動を促進

した地理的・社会経済的要因を探り、沿岸各地の植民地経営の発展状況と、全植民地に通有する性格を指摘する。この際、例えば、氣候をもつて碍られる全植民地の中、唯一の例外たるスキティア地方の氣候を、古代ギリシア人は如何に観じたかという問題をはじめ、地理的知識発達史上において植民活動の果たした役割をも述べられている。小牧実繁『野の開墾——蒲生野の場合』——近江蒲生野について、その範圍の考定、ついで古代における台地周辺の湧水地帯の耕地化にはじまり、中世以降の井堰と野井戸、明治以降ことに昭和初期揚水機の普及、と「水」をめくりながら、この洪積台地に対して試みられた開拓の進展過程が追跡される。喜多村俊夫『伊勢松坂在西黒部に於ける竹内新田の意義』——紀州藩に対し、用達商人的な特殊関係をもち且つ地土である竹内が、最も有利な条件をもつ開墾権、またあたかも当時先進地域に生じていた町人請負新田におけるが如き領内支配権を得ていたところに、当該新田計画の特異性を指摘する。そして、かかる特殊なケースを生んだ西黒部村の性格と、新田の計画より挫折にいたる経過がのべられる。棚

瀬善一『十勝平野開拓の若干の考察』——北海道総合開墾五カ年計画の主要対象地域である十勝平野の開拓史と開拓の問題点。辻田右左男『合衆国西部開拓におけるタウンシップの意義』——或いは条里制との形態的類似性の故に、或いは屯田兵村のモデルとして、屢々引用されつつも地理学的研究より逸されていたタウンシップを取りあげ、その本来の意義、北米植民時代および西部開拓時代に果たした役割、分布を論じ、二〇世紀に入つてよりは、既に一つの歴史的景観として遺構化せんとしている現状に及ぶ。内田秀雄『近江の集落景観の一特質について』——近江仏教地理的研究——近江の集落には必ず寺院がある……この注目すべき現象を、先ず分布の上から考察し、ついでこの「仏教王国」形成の因を、叡山・真宗・禪宗・浄土宗の発展および近江商人の「浄業」等々に求めて論述する。矢島仁吉『西上州における村落構成の一面』——とくに地方核心集落と周辺農村との関係について——安中藩の城下町であり、中山道宿場町であった安中町とその周辺農村の場合につき、城中課役・助郷課役など封建都市よりの農民課役が農村生活に及ぼした影

響をのべる。この際「農村の側から地方都市との関係を考察」する立場をとり、またその要を説く。藤岡謙二郎『山間支谷に位置する

地方の歴史的集落——三重県一志郡上多気の場合——』「かつて特殊な機能をもつ故に榮え、その機能の消滅と共に衰頽の傾向をたどつた集落」の一事例として上多気をとりあげる。即ち北畠氏の拠つた初期城下町の集落の時代より、参宮街道の宿場町時代、明治初年および現在に至るこの「歴史的集落」の変遷史をとくに交通系の変移に関連させて追求する。山口平四郎『港湾の地理的研究に関するメツキングの方法——「港湾のもつ屬性の中で何が地理的研究の対象になるべきか」……メツキングはリヒトホーフェン・ヘットナーの二先学の影響下に《地域的な把握方法》を見出したとする。ついで港湾地域自体の研究法と港湾を包括する広い地域の中における港湾の地理的性格の研究——即ちメツキングのいわゆる《港湾の Coastlay》の研究法を検討し、最後に港湾研究史上における彼の位置づけ、及びその著「日本の港湾」を主とする彼の業績が紹介される。中村良之助『國民集團の定住化に伴う地域の問題——國

民經濟の地域的課題——』——（私はこの難解な論考を誤りなく、一貫した要約の形にして内容紹介する自信がない。よつて小節の見出しを掲げてこれに代えさせて頂く。）(4)領土國家と統治地域との經濟關係——國民共同

社會的利益の管理と要求——、(5)國民經濟及び市場、(6)社會主義思想における地理的環境——地理的環境論について（マルクス主義者はどう考えているか）、(7)國家の地域と自然的基礎としての理解（地域の特殊具體性と國家の個性との關係）、(8)集團による新地域の造成——經濟開發と行政の協力。鳥越憲三郎『琉球の土地整理の経緯——ノロクモイ地の処分——』——原則として土地私有が認められず、班田の制に拠つていた琉球の土地制度が、明治三十六年土地整理法によつて改革されるに至る経過、とくに琉球國時代におけるノロクモイ地の処分経過が述べられる。村松繁樹『漁村の変容過程——崎志摩和具の場合——』——女子労働を生産活動の中心におく「アマの村」であるが故に、古くユニークな家族構成、村落構成を殘存せしめていた和具が、明治以降、遠洋漁業への進出、真珠養殖業の盛行、觀光地化の

經濟構造の近代化に伴つて、社會構成を變容させてゆく過程が分析される。

\* \* \*

以上を以て杜撰な内容紹介を了るが、紙數に制約されて簡にすぎた点は執筆者各位に御詫び申し上げたい。なお、いちいち記すことを懈つたが、殆んど全ての執筆者が各々多年手がけてこられた研究テーマを取りあげておられ、いわば既に自家薬籠中の研究素材、研究方法を悠々十分に駆使しておられる體がある。私が直接御指導をたまわつておられる先生方について述べさせて頂くならば、織田先生は年来の古代地理学史研究の上から、古代ギリシアの植民時代をギリシア人の地理的知識の顯著な拡大期として把握され、その基礎としてここでは植民地の分布、經營の実態を追求しておられるのである。藤岡先生は『先史地域及び都市域の研究』の著において表明された地域變遷史的立場より、いま一つの歴史的集落の変貌を取り扱われ、西村先生は數年來志向しておられる伝統工業の立地・盛衰の研究に、封建的所領關係という新しい分析視角からの照射を行われたわけである。また村松先生の漁村研究は、大和平野の集村、礪波の

散村、山村（五箇山の變容過程）という一連の御研究の一環としての意味を担うものである。また交通地理学の山口先生はメッキングを語りつつ、先生自らの「港灣の地理学的研究法」を開陳されておられるわけである。這般のことはいずれの論文についてもいえ、このことが本論文集に高い水準を賦与し、《落着き》の感得される所以をなしているように思う。

\* \*

以下、紙面の余白をかり、若干の感想を附け加えたい。田中先生が迎えられた「古稀」という寿齡のとうとさ、京大地理学科御卒業以来四十年間の研究業績のゆたかさというものが、私をして、八年輪Vであるとか、八世代Vであるとかについての感慨にふけらせる。そのとき、ただ自分たちがまだそう幾つも年輪をかさねていない、それ故にもちうる将来への果敢ない可能性のみを握り所として、私は本論文集について幾つかの失礼な疑問をもった。それは前言せる《落着き》ということ、即ち、もはや地理学という学問に対して疑いや迷いを感じておられないという点への不満である。ひとつひとつの論文に対しては、多くの教示をうけ、学ぶところ甚だ大

きかつたけれども、すべて二十三篇を前にするとき、正直のところ私は、八地理学何処へゆくVの迷いを禁じ得なかつた。また、或は「ここではこうなっており、そこでそうなっている」或いは「かくしてかくなつた」という記述に遭うとき、矢張り何か分析のきかない箇がゆさや、進るべき論理のないもどかしさを覚えた。それ故に、実証的な記述の中に蔵された卓れた方法論に敬服しながら、一方では比較的方法論を表面にうちだしておられる研究にインタレストを喚起された。しかし、そこにも八世代Vという感慨を催さざるを得ない箇所があつた。例えば宮川教授の精緻な論証に魅かれつつも、その序説において、およそ研究態度には①西歐的偏見による解釈の不可なること、②既成公式の適用の不可なること、③因果的説明に了るの不可なること、④一面的考察の不可なること等を、きよう更めて説かれることを不思議に思つた。また例えば氣候順化の問題には人類の担うホモ・フアベル、ホモ・サピエンスとしての両性格を勘案すべしとする和田教授の所説には賛同しつつも、何故、「背推動物、哺乳類、霊長目人科に属する Homo sapiens」であるとか、「生産過程は労働力と労働手段と労働現象の

三要素から成る」とかいふところより説きおこさなければならぬのか——そこに何か間遠いものを感じた。また例えば中村教授の野心的な労作に関心を注ぎながらも、後学の徒である私たちは、幸にすでに地理学専攻のはじめから《地域》という有用な概念を教えられてきているので、「人間の地域」という新造語を用いる」要を感じないと感じた。しかし例えば次にみるように、教授の提起された《人間の地域》という概念は、《地域》の概念を超えるものなのであろうか。即ち、「国土は人間の地域の一つであるから（略）人間の集団本位の考慮関係において、抽象的な国家的権力集中体に対して、その具体性から、これら、山河平野・諸機關・國民等一切を自然的基礎」と理解が成立するのである」と説かれるが、私たちが「民族や国家諸制度について、それを自然的基礎だという理解は至難のようである」のは、私たちが「新進だが未熟の人文地理」学徒なるためであらうか。ともかく「理解至難」の文章であつた。

附言の条りは、年輪いまだ足らざるものの一妄評として幸に御寛恕あらんことを。

(A5三一八頁 定価五〇〇円 柳原書店)

——矢守一彦——